

羅針盤 vol.81

校長 白岩博明

7月19日(金)に1学期終業式を終え、夏休みに入っています。先頃、気象庁が今夏の気温を「10年に一度の熱さ」になるだろうと予想しました。35度を超えるという、連日の厳しい熱さです。水分と睡眠は十分に取り、無理のない行動を心がけ、熱中症には注意したいものです。

7月13日(土)、協創フォーラムにおいて”2人芝居”(「父と暮せば」)、17日(水)には音楽鑑賞において”ミュージカル”(「SUNDAY」)と、2つの舞台を鑑賞する機会がありました。いずれも本校の前身・鈴峯女子高校の卒業生が出演したもので、2人の卒業生が自分の目標に向かって突き進んでいます。実に頼もしい限りです。きらきらと輝き放つ凛とした姿に、後輩たち生徒は大いに刺激を受けたに違いありません。

(右の写真は、2人芝居「父と暮せば」の一場面)



「良薬口に苦し」

昨年9月11日の全校朝礼で、一冊の本を紹介しました。『世界の古典と賢者の知恵に学ぶ 言葉の力』(作者:シン・ドヒュン、ウン・ナル)という本です。40歳になった頃からだと記憶していますが、国語の授業や部活動の指導を通して、あるいは年齢相応に交際・交流範囲が広まるにつれて、言葉の使い方、言葉の持つ意味についてそれまで以上に意識して過ごしていたように思います。そして、65歳という自分の中では節目の齢になる昨年、「言葉は言霊」であるということを痛切に感じながら、改めて言葉についての認識を深めたいと思った最中に出会った本でした。あれから何度も読み返しては言葉について再確認し、未だ成長途上であり続けたいと思うばかりです。

一つの言葉には、語り手と聞き手の両方の人生が込められている。まず語り手が自分の意味を込めて言葉を紡ぎだす。次に聞き手が、その言葉を受け止め、自分の人生に当てはめて解釈する。このようなやりとりが言葉を生み出す。

という書き出して始まり、言葉をどのように使えばいいのかを学ぶためのプロセスを、修養、観点、知性、創意工夫、傾聴、質問、話術、自由、実践の8つの段階でまとめています。

私が特に注目したいのは、傾聴の段階です。その中に、次のような興味深い記述があります。

言葉一つが人に与える傷は、思っているより深いものだ。根拠のない非難を受けると、そこに根拠がないがために苦痛であり、理由のある批判は理由があるがために、また苦痛となる。(中略)筋の通らない批判なら無視のしようもあるが、自分で考えてもあなたの欠点を正確に突いた批判であれば、聞き流すことは難しいだろう。このとき、あなたの心の中で欠点を克服しようという決意や、欠点に気づかせてくれたことへの感謝とともに、欠点を認めまいとする反感と怒り、羞恥心な

どが入り交じり、相争うかもしれない。(中略)あなたを批判した人は、あなたの足りないことを気づかせてくれ、あなたをさらに成長させてくれる人だ。

過去、同様なことが幾度かありました。「あなたの弱みは、〇〇かなあ。なぜなら…」と正面から言われ、動揺を隠せず、立ちすくんだことがあります。それは十中八九当たっていることを指摘され、言い返しよりもなく、腹立たしかったからです。立ち直るまで相当の時間を要しました。しかし、発せられた言葉が心許せるような、想いを託せるような人からのものだったら、あるいは、その言葉は自分に必要なことに違いないと納得させられるものだったら、どうでしょうか。

往々にして、人は賛同的同情的な言葉に心寄せ、搖らぎがちになりますが、その言葉は一時の自己満足に過ぎないでしょう。むしろ、「あなたの弱みは」と、自分に欠けていることを心ある言葉で指摘してくれる”感謝すべき人”に気づき、その人と言葉を宝とすべきではないでしょうか。

「良薬口に苦し」(孔子の言葉)ということなのです。それは「良く効く薬というのはとても苦いものだが、よく病気を治す。転じて、真心から諫めた言葉は、快く聞き入れがたいものだが、有益である。」という意味です。語り手の真心(飾りや偽りのない心。真剣に尽くした心。)こもった言葉を聞き手は受け止め、次への一步に繋げていくべきです。それが傾聴なのです。そんな語り手の言葉を聞き流し、受け流すようではその人の成長はありません。

自分を成長へと導いてくれる人、”感謝すべき人”的存在に気づきましょう。こうしたことも「報恩感謝・実践」(建学の精神)の体現化でもあるのです。「言葉は言霊」、言葉の持つ様々な力について、再考してみませんか。